

冬の梅

松岡隆子

水の面に彩を重ねて散紅葉
綿虫の飛びゆく方へ歩を返す
追ひつめるものにはあらず雪蛍
夕空が青くて子等にクリスマス
待つ人が来るマフラーを巻きなほす
膝の荷に日当たつてゐる初電車
鶏旦の一步に高き男坂

佳き言葉胸にをさめて初神籤

人日の鳩と日向を頒ちけり

冬の梅しづかに数を増やしけり

悼・山本和美さん

寒梅の悼みの色として紅き

笹山に一月の日の鎮もれり

鷺田清一氏の「折々のことば」(朝日新聞)に「朝、家を出てから、学校に着くまでであったこと、見たことをきちんと言葉で伝えられればいい。詩を書くのはそのあとでいいでしょう」という谷川俊太郎の言葉が紹介されていた。劇作家・演出家の平田オリザとの対談後、今の子どもたちに最も大事な「国語の力」は何かと質問されて答えた言葉である。「今日見たもの、感じたことをきちんと五七五の言葉で伝える」と置き換えてみた。あとはそれをどう詩に昇華させるかである。最近「俳句は日記」の手強さにたじろいでいる。「俳句は日記」とは畢竟俳句を極めることに他ならないのである。